
トゲーム KILLER QUEEN CODE:Destiny 宇宙最強の幼馴染コンビと元主人公

トフリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シークレットゲーム KILLER QUEEN CODE：Destiny 宇宙最強の幼馴染コンビと元主人公

【Nコード】

N2585V

【作者名】

トフリ

【あらすじ】

ガンダムSEED DESTINYのキラ・ヤマト、アスラン・ザラ、シン・アスカがシークレットゲームに参戦！
彼らは圧倒的な力を成すのか？ 何を護るのか？
そして・・・再び世界を滅ぼそうとする彼を止めることができるのだろうか・・・！？

キラは言う、かつてもう一人の彼に言ったように

「命はなんにだって一つだ！」

プロローグ(前書き)

どうか見てください

プロローグ

カーテンの引かれた薄暗い部屋に、うめき声とむっとする汗の匂いが立ち込める。乱れたベッドの上で金髪の男が悶え苦しんでいた。

「くっ……うっ……う……」

シーツを強く握り締めていた手が震えながら上がり、必死に何かを探していた。

だがあまりの苦痛に手が痙攣し、はずみで置かれていたものが床に払い落とされた。

その中には、残り少ない薬のビンと風変わりな銀色の仮面もあった。苦痛に悶える男は、手を伸ばして薬瓶を取ろうとしたが、力を失なつてその体ごとベッドから落ちた。

必要最低限の家具しかない殺風景な部屋に、激しい息遣いと、獣のような唸り声が響く。

男はついに薬のビンを手にし、噛み砕くようにそれを飲み込んだ。男はぐったりと横になり、痙攣も収まり、息も整い始めていたが、完全に収まる前に携帯電話が鳴った。

「……くそっ……っ」

男は毒づきながらも電話にでた。

「……クーゼです……」

クーゼと名乗った男は先程まで苦しんでいたのにもかかわらず、今のは完全に抑制された冷静な声だった。

「これは色条様・・・何か御用でも？」

「いや、次のゲームのことについてだが、君に決まったことを伝えようと思ってるね」

クルーゼは小さくほくそ笑んだ。

「それはそれは・・・分かりました、喜んで務めさせていただきます」

クルーゼという男はゲームマスターになってから僅か2年足らずというのに既に20回近いゲームマスターを務めたということで組織の中でも有名だった。

「ははは、君がゲームマスターだといつも客の反応が良くてね・・・君は本当に優秀なゲームマスターだよ」

いくら、優秀であっても、一介のゲームマスターに過ぎないクルーゼが組織のトップである色条良輔がわざわざ電話をかけるなど普通は考えられないことである。

それは色条と呼ばれた男はクルーゼというこの男を個人的にも高く評価していたからであった。

クルーゼはゲームマスターとして優秀なだけではなく、彼が持ち込んだ技術が遺伝子操作技術を始めとする最先端のものをはるかに凌駕するものばかりであったからだ。

組織はクルーゼによって持ち込まれた技術を惜しみなく投入し、先日ついに組織にとって目の上のこぶであったエースを壊滅に追い込んだのだった。

その結果組織の力はさらに強大となった。

それが色条良輔がここまでクルーゼという男を評価している一番の

理由であった。

「ありがとうございます、色条様」

クルーゼは丁寧お礼を言いながらゾツとするような冷たい笑みを浮かべていた。

もう彼の計画は進み既に最終段階に達し、もう間もなくそれが果たされるからであった。

「では、次のゲーム頼んだぞクルーゼ」

色条良輔はそう言って電話を切った。

電話が終わったとたん、クルーゼはベッドの上に倒れ込み、溜め込んでいた息遣いをいつきに開放した。

「はあっ、はあっ、はあ、はあ・・・クククククク」

クルーゼは身体が酷くだるいにも関わらず笑いが止まらなかった。その笑い声は当人以外が聞けば、戦慄してしまいそんな冷酷な声だった。

「まもなく最後の扉が開く、私が開く、そしてこの世界も終わる・・・」

（コーディネイターが存在しないこの世界でも人は愚かだ）

彼にはもうほとんど、時間が残っていないなかった。

薬も残りわずかで2週間で使い切るだろう。

この世界ではこの薬は作れず、大事に使ってきたがもう残りはない。ハラウ・ル・クルーゼは次のゲームで全てを終わらせることを己

の憎悪に誓った。

プロローグ（後書き）

ありがとうございました。

少しづつ上げていきます。

悪いところがあったら遠慮なく言ってください。

用語集（前書き）

用語集です。

結構いい加減ですけど・・・（笑）

詳しく知りたい方は [wikipedia](#) へどうぞ

用語集

用語集

・ハラウ・ル・クルーゼ

機動戦士ガンダムSEED』および『機動戦士ガンダムSEED DESTINY』の登場人物。とある人物のクローンで、人類全体に対し激しい憎悪を抱えており、キラたちのいる 世界を滅ぼそうとしたが、キラとアスランの活躍によって失敗した。

・ACE コズミック・イラ

『機動戦士ガンダムSEED』シリーズにおける架空の紀元。キラたちの住む世界の年号で、西暦にかわり制定された。

・PLANT (P.L.A.N.T.: Productive Location Ally on Nexus Technology) プロダクティブ・ロケーション・アレイ・オン・ネクサステクノロジー) は、コーディネーターが住むスペースコロニーの総称。アスランの母国で、今はキラとシンが住んでいる。

・ナチュラルとコーディネーター

『機動戦士ガンダムSEED』および『機動戦士ガンダムSEED DESTINY』に登場する架空の人種概念。

コーディネーターとは、「遺伝子を調整された」ということにより、それに対して遺伝子調整されていない通常の人類はナチュラルと呼ばれる。

アスランとシンはコーディネーター、ちなみにキラはスーパーコーディネーターである。

・ ムスーパーコーディネーター

人口子宮を用いて生み出され、完全に計算通りに生まれた最高のコーディネーター、ちなみにスーパーコーディネーターはキラ・ヤマトただ一人だけである。

・ ム血のバレンタイン

プラントの農業用コロニー「ユニウスセブン」が、地球軍側MAの放った核ミサイルにより壊滅した事件。C.E.70年2月14日の聖バレンタインデーに起こったため、血のバレンタイン事件と呼ばれる。これによりアスランの母は亡くなった。

・ ムZ.A.F.T

ザフト(Z.A.F.T: Zodiac Alliance of Freedom Treaty「自由条約黄道同盟」)の略称、ムプラントが組織した義勇軍のことで、キラとシンが入隊しており、昔はアスランも入隊していた。

・ ム連合

地球連合の略称、『機動戦士ガンダムSEED』及び『機動戦士ガンダムSEED DESTINY』に登場する架空の国家連合。ザフト建軍にともない、国際連合の発展的解消を経て成立した新たな国際組織のこと。キラが昔入軍していた。

・ ムヘリオポリス
L3宙域に存在するムオーブの資源衛星コロニーのこと。

キラが昔住んでいた

・ ムオーブ
ムオーブ連合首長国(オーブレんごうしゅちょうこく、United Emirates of Orb)は、アニメ『機動戦士ガンダムSEED』及び『機動戦士ガンダムSEED』

DESTINY』に登場する架空の国家のこと。キラとシンの母国

・ハザラ派
ハトリック・ザラを支持していた人々の総称のこと。

・ハトリック・ザラ

アスランの父親でプラントの議長を務めていたが、ナチュラルを絶滅させようとしたため、部下に撃たれ命を落とした。

・ロゴス、ブルーコスモス

ロゴスとはコスミック・イラに存在する死の商人たちの集まりで、軍需産業複合体のこと。

ブルーコスモスとは、それ自体が統一された組織や結社ではなく、反プラント、反コーディネイター思想とその主義者の総称のこと。「青き清浄なる世界のために」がスローガン。

e p i s o d e 1 p a r t n e r s 編 キラside 天然同士(前書き)

話はメサイア攻防戦から数ヶ月後という設定です。

キラside アスランside シンside キラsideと

投稿していきます。

episode 1 partners 編 キラside 天然同士

コミック・イラ
「CE」 74年 某日

プラントの国道を一台のエレカが通っていた。

そのエレカを運転しているのはまだ二十歳前の青い髪をした青年だった。

「アスラン、そんなに怒らないでよ」

助手席に座っている茶色い髪の大人しそうな、エレカを運転している青年とほぼ同年だと思われる青年が苦笑しながらも青い髪の青年に声をかけた。

「別に怒ってないさ」

アスランを呼ばれた青年はどう考えても怒っているとしか受け取れない仏頂面で言葉を返した。

「たまには、いいじゃないですかアスランは考えすぎです」

車の後部座席から少し身を乗り出してピンク色の髪のおっとりとした少女が運転している青年に語りかけた。

「ラクスマで・・・全くもう」

アスランは憤慨し、話にならないと言いたげにそっぽをむいた。

確かに、アスランの言うことは概ね正しいだろう。

プラントの評議会の議長であるラクス・クラインが護衛もなしに、

こんなショッピングをするなど・・・

「大丈夫だよ、今の『プラント』は治安もいいし、それにアスランだっているし」

キラと呼ばれた青年は穏やかな笑みを浮かべて言い切った。それだけアスランを信頼しているのだろう。

「キラ・・・お前ってやつは・・・」

アスランはあきれ果て大きな溜息をついた。

「私だって議長である前に一人の女の子なんですよ、たまには普通に買い物したいんです」

ラクスはのんびりとした口調で言った。

それも事実だろう、プラントの最高の権力者となった以上こうやってショッピングをする機会などなかなかないのだろう。

「・・・分かったよ・・・そろそろ着くぞ・・・」

アスランは理解はしながらも納得はせず、依然慥然とした表情のまま駐車場へとハンドルを切った。

アスランは過去を思い返していた。

アスランとキラはまだ物心つく前から一緒に、兄弟のように育った。世間一般でいう幼馴染である。

よくキラが宿題をアスランに頼り、アスランはなんだかんだ言いながらもいつも手伝っていた。

今となつてはただ懐かしい。

あの頃の二人は何も知らず、平和に暮らしていた。

だが、あるときアスランはプラントへと引越すことになった。

原因は「ナチュラルとコーディネイター」の戦争の可能性が高まったからだつた。

それでもアスランとキラは戦争など起こるわけないと思つていた。

しかし、「血のバレンタイン」の悲劇により、アスランの母は亡くなつた。

それによりアスランは「Z A F T」に入隊し二度とあのような悲劇を繰り返させないために戦つた。

あるときアスランは作戦で「連合」の新型起動兵器を奪取するために「ヘリオポリス」へと進入していた。

そのとき燃え盛る火炎の中でアスランとキラは再会した。

それがすべての始まりだつた。

2人は不幸にも戦つた。

アスランはZ A F Tの為に、キラは仲間を守るために・・・

2人はお互い傷つけあつた、そしてお互いの友人を2人は殺した。

2人は奪われた痛みに関われお互いに殺しあつた。

結果的に2人は助かり今度は幼馴染を殺しかけたことに苦しんだ。

そして二人は気づいた。

戦争の愚かさ、間違いを・・・

アスランとキラはその後戦争を終わらせるために戦い、そして最終的には二度の世界大戦を終結させた。

2人は再び対立することもあつたが、最後にはまた分かり合うことができた。

あの時のアスランは相手に甘えていたのだ。

あいつとは、心が通じ合つてる。

そう思い込んで相手が理解してくれないことに苛立つた。

それは本当の理解ではない。
大事なものは、どんなに一緒にいても、どんなに語り合っても衝突することはある。

それを理解し、常に分かり合う努力をすることだ。

アスランはそれだけは二度と忘れないように心に刻んでいた……

キラ s i d e

「……………んん……………」

キラ・ヤマトは身じろぎをしながらゆっくりと目を覚ました。

「んん……………」

大きく背伸びをしながらゆっくりと上半身を起こした。

「ん…………あれ？」

そこでキラは初めて自分が見知らぬ場所にいることに気が付いた。

「僕は…………どうして…………こんなところに…………？」

キラは記憶をたどり、この場所の手掛かりを手に入れようとした。

「確か、ラクスとアスランと一緒にショッピングに行ってラクスが
試着室に入ったあとアスランと話していて……………」

そこまで考えてとあることに気がついた。

(いったい誰が、僕をこんなところに連れてきたんだろう)

キラはコーディネイターの中でもトップレベルの実力者であり、今はザフトの黒服となり権力もある。

つまり、キラを拉致するなど並大抵のことではないのだ。

おそらく、キラをこんなところに連れてきたのはコーディネイターだろう。

ナチュラルには絶対に不可能だとは言いつつ切れないがそれは一匹の野良犬が、訓練を受けマシンガンを持った軍人の一個小隊全員をかみ殺すことより難しいだろう。

それにコーディネイターなら動機もある。

今だに「PLANET」には「ザラ派」と呼ばれる勢力がある。

ザラ派からしてみればラクスは宿敵で、自分はそのラクスの恋人だ。十分に考えられる。

「アスランとラクスはどうしたんだろう・・・？」

ラクスは着替え中だったので気づかなくてもそれほど不思議ではない。

だが、アスランがキラが拉致されるのを黙って見ているなど有り得ない。

普通に考えればアスランも同時に拉致されたと考えるのが自然だろう。

しかし、そう考えるとますます有り得ない。

アスランは白兵戦ならキラ以上の実力者だ。

そんな2人を全く抵抗させずに同時に拉致するなど・・・

「考えてもしょうがないか・・・」

キラはまずあたりを調べてみることにした。

あたりを見回すと、無機質なコンクリートと埃にまみれた大きなタンスと、古びれた机の上に置いてある小さな黒い物体があった。

キラはその黒い物体を調べるためにベットから降り、それを手に取った。

「これは・・・PDA?」

それはトランプを模したPDAで無駄に厚みがあり「4」と表示されていた。

キラからしてみれば、ずいぶんと低レベルな技術で作られていた。それも当然だろう、キラはまだ知らないがここはまだ西暦と呼ばれる時代で、キラからしてみれば少なくとも1世紀は前の技術で作られているからだ。

この時代ではそれなりに高度な技術なのだろうが、CEにおいては前世紀の取るに足らない技術なのだろう。

キラはPDAの画面に触れてみた。

ピッ

画面が変わり、(ルール、機能、解除条件)と3つの項目が表示された。

キラは初めにルールの項目に触れた。

ピッ

再び画面が変わりルールらしきものが表示された。

ルール1

参加者には特別製の首輪が付けられている。それぞれのPDAに書かれた状態で首輪のコネクタにPDAを読み込ませれば外す事ができる。条件を満たさない状況でPDAを読み込ませると首輪が作動し、15秒間警告を発した後、建物の警備システムと連携して着用者を殺す。一度作動した首輪を止める方法は存在しない。

ルール2

参加者には1 - 10のルールが4つずつ教えられる。与えられる情報はルール1と2と、残りの3 - 10から2つずつ。およそ5、6人でルールを持ち寄れば全てのルールが判明する。

ルール5

侵入禁止エリアが存在する。初期では屋外のみ。進入禁止エリアに侵入すると首輪が警告を発し、その警告を無視すると首輪が作動し警備システムに殺される。また、2日目になると侵入禁止エリアが1階から上のフロアに向かって広がり始め、最終的には館の全域が侵入禁止エリアとなる。

ルール6

開始から3日間と1時間が過ぎた時点で生存している人間を全て勝利者とし20億円の賞金を山分けする。

「これは・・・どういうことなんだ・・・？」

キラは驚きながらも、流暢にPDAを操作し、解除条件と特殊機能の項に移った。

解除条件：「全ての階で6時間以上過ごすこと、なお過ごした時間は合計で6時間以上になればよい。」

特殊機能：「音声の録音 最大で5分間まで」

「・・・・・・・・・・」

キラはまるで全て暗記しようとするかのように、じつくりとそこま
で読み進めた。

「っ！」

突然足音が聞こえ始めた。

「ほかの参加者が・・・？」

いや・・・もしかしたら、キラを拉致した連中かもしれない。
もしそうだとしたら・・・間違いなく武装しているだろう。

いくらキラでも素手で武装したコーディネイター数人相手は難しい
だろう。

（だが、足音からしてどうやら一人・・・）

ほかの参加者と考えるのが自然だろう・・・

キラはドアに近い壁際に身を寄せた。

そこはちょうどドアが開くと外側からは死角になるところだった。

キラはそこで待ち伏せをするつもりだった。

話し合いできそうなら声をかけ、そうでなければやり過こすつもり
だった。

（まだ、ゲームが本当かどうかはわからない・・・でも万が一本当な
ら・・・）

カッ、カッ、カッ

足音がだんだんと大きくなりついに部屋のドアが開いた。キラは神経を集中させて入ってくる人物を凝視した。

入ってきたのはキラよりも少し年上だと思われる女性だった。

首輪をしているということは、ほかの参加者なのだろう。

まあ、拉致してきた連中が自分を騙す為に行っている可能性もあるの
だろうが。

その女性は黒いゴスロリを着ており、頭には大きなりボンをしてい
た。

あまりにも場違いな雰囲気を漂わせた人物が現れたため、キラは多
少拍子抜けしながらもその女性から目を離さなかった。

その女性は部屋を見回し、誰もいないことを確かめるとすぐに部屋
を出ていこうとした。

「あの、すみません」

さし当たったの危険がないと判断したキラは女性を呼び止めた。

「きゃあ」

キラがドアから身を放して話しかけると、その女性は小さな悲鳴を
上げた。

誰もいないと思っていたところで突然話しかけられたら、誰だって
驚くだろう。

「あ、あの・・・ええと・・・」

女性を驚かせてしまい、僅かにしどろもどろになり、うまく言葉が
続けられなかった。

女性は驚いたまま固まっていたが、不意に「ああ」となんとものんびりした声をげ、勢い良く手と手を合せ、こう言い放った「隠れんぼしてたんですね！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

キラはしばらく何も言えなかった。

「僕は、キラ・ヤマト コーディネイターで、恋人と親友と一緒にシヨッピングしていたところでした」

「私は綺堂渚、バイトの帰りに誘拐されてしまったみたいですよ」

二人はキラがいた部屋のベットに座り込み、軽く自己紹介を済ませていた。

「渚さんはこれ持ってますか？」

キラはそう言ってさきほど見つけたPDAを見せた。

「はい、それなら私も持ってます」

渚はそう言って自分のカバンからPDAを出し、それをキラに見せた。

それは、電源は切れていたが確かにキラのPDAと形状は全く同じだった。

「私、こうゆうゲームってよく分かんなくて」

渚はどうかやらPDAをゲームと勘違いしているようだった。

「違いますよ、これはPDAといって、携帯型のパソコンみたいなものです」

「そうなんだ」

渚はそう言つて、PDAを手の中で回転させて全体的に見回した。何気なくキラはそんな渚をラクスと姿を重ねていた。容姿は全く似てないが、渚の可愛らしい声や包み込むような笑顔はあつたばかりのラクスを彷彿とさせた。もしかしたら渚にもラクスのような強い一面があるかもしれない。そう考えると、キラは渚に対し自然と親しみが湧いた。

キラと渚はお互いに情報を交換することにした。

だが、一つだけ問題があつた。

渚はPDAを操作できなかったのだ。

渚がPDAを操作できない以上PDAに書かれてある条件や機能がわからない。

また、渚はこのゲームにおいて圧倒的に不利となる。

だからキラは渚にPDAの使い方方を教えていた。

ヘリオポリスにいた頃のキラならばこのPDAに書かれていることなど信じず、自分のPDAを簡単に見せていただろう。

だが、戦争を経験し様々なことを知つたキラはそうはしなかった。

「ロゴスやブルーコスモス」などの命を奪うことをなんとも思わない人々もこの世にいるのだから。

「僕は4と6のルールが乗ってました。渚さんのPDAには何番のルールが乗ってました？」

キラがPDAの操作法を渚に教えたことにより、まだ他たどしいが、だいぶ操作できるようになっていた。

「私のPDAには3と7が乗ってたよ」

渚がそう言っつて、ルールを読み上げる。

ルール3

PDAは全部で14台存在する。14台にはそれぞれ異なる解除条件が書き込まれており、ゲーム開始時に参加者に1台ずつ配られている。この時のPDAに書かれているものが、ルール1で言う条件にあたる。他人のカードを奪っても良いが、そのカードに書かれた条件で首輪を外すのは不可能で、読み込ませると首輪が作動し着用者は死ぬ。あくまで初期に配布されたもので実行されなければならない。

ルール7

指定された戦闘禁止エリアの中で誰かを攻撃した場合、首輪が作動する。

これで、9つ中6つのルールが分かったことになる。

ルールを全て知る為には最低でもあと2人の人間と情報交換しなければならぬ。

「渚さんはこのPDAに書かれていることは本当だと思いますか？」

キラは前々から思っていたことを渚に聞いた。

「うん、よく分かんないな。殺すとか怖いこと書いてあるし」

キラもそれは同意だった。

だが、首輪の存在によって全て冗談だとい切れないのだ。おそらくだが首輪は一人一人の首のサイズをしっかりと測って作られているようだ。

もし、服のようにS、M、Lとサイズがあり首周りが長いほど大きいサイズの首輪をつけられるようにしているのならば人によっては首の余裕の差が大きかったり、小さかったりするだろう。

だが、実際にはキラと渚の首輪はサイズが違うが両方とも隙間なく付けられている。

そこから首輪の一つ一つが特注であることが推測できる。

つまり、首輪には大金が懸っているのだ。

キラがそんなことを考えていると、渚が声をかけてきた。

「ねえキラ君、これからどうしたらいいのかな？」

「・・・そうですね、まずは他の参加者の人を探してみましよう。そうしたら知らないルールを知ることができるかもしれないし、それにルールの真偽がはっきりすると思いますから。それでいいですか？」

キラがそう聞くと、渚はそれに応えて頷いた。

「分かりました、じゃあ行きましよう」

そう言ってキラと渚は共に行動を始めた。

episode 1 partners 編 キラside 天然同士(後書き)

読んでくれてありがとうございます。

2ルート書く予定です。

次話は今週中に投稿します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2585v/>

シークレットゲーム KILLER QUEEN CODE:Destiny 宇宙最強の幼馴染コンビ

2011年10月9日10時38分発行